

第29回日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウムについて 会長挨拶

地方独立行政法人 東京都立病院機構
東京都立墨東病院 輸血科
藤田浩

第29回日本輸血細胞治療学会秋季シンポジウムを、令和4年10月27日～29日の期間、新宿住友ホールにて、ハイブリッド開催いたします（一部オンデマンドあり）。HP開設時、抄録提出時に引き続き、この度は3回目の挨拶となります。今回のe-Newsではお菓子について語りたと思います。

今回のシンポジウムに共感していただいた企業、個人からの寄付、財団からの共催をいただきました。それを原資として、墨東病院検査技師さまの発案により、当院輸血ラウンドチームの学会事務局活動の一貫として、シンポジウムにお菓子を提供することを企画しました。毎月行われるラウンド会議では、東京都のお菓子を複数、試食することを繰り返し行い（会長の自腹でしたが、菓子選定は本当に楽しいことだと、実感しました）、下記の3社のお菓みに決められました。プログラムとともに、紹介します。また、お菓子の数量は限定であり、参加者すべての方にいきわたらない場合がありますことをあらかじめご容赦ください。

1 スイート情報交換会（令和4年10月28日 金曜日 18時～19時）

学会理事長、会長、大学病院輸血部議長、来賓の挨拶などのほか、東京都の情報発信を企画しています。そこに提供するお菓子は榮太樓総本舗（東京日本橋）になりました。決め手はきんつばやどら焼きなどのあんこ菓子と、ピーセン、かりんとうなどが会長の好みであったことです。ご期待ください。



写真は会長撮影、実際に提供するお菓子は異なります。

2 モーニングレクチャー（令和4年10月29日 土曜日 8時20分～8時50分）

在宅輸血（ホールA）、骨髄移植（ホールB）などの2講演を企画しております。そこで提供するお菓子は、贅沢島レモンです（小笠原 父島 TOMATON）。決め手は、この味と舌触りです。



写真提供：TOMATON

3 企業展示スタンプラリー（令和4年10月28日～29日 開催期間中）

10企業12ブース（令和4年8月現在）に企業展示されますので、会員の皆様には、情報収集、企業の方々との交流を期待します。5つ以上の企業展示ブースに訪問していただいた会員の方には、お菓子を提供いたします（スタンプラリーの詳細は、当日ご確認ください）。そのお菓子は、金太郎あめです（金太郎飴総本店、台東区根岸）。



会長写真撮影 アマビエ3種類（疫病退散）、ウクライナ、金太郎飴。実際提供する金太郎飴は異なるデザインのを予定しています。

「全国大学病院輸血技師研究会について」

東京医科歯科大学病院 輸血・細胞治療センター技師長
大友直樹

「全国大学病院輸血技師研究会」（技師研究会）は「全国大学病院輸血部会議」（輸血部会議）を構成する大学病院の輸血細胞治療部門に属する検査技師を会員として活動しています。発足は1990年に遡り，“技術向上と情報交換”を目的に”全国国立大学輸血部会議“の下部組織として“全国国立大学輸血部技術懇談会”と称していました。当時の状況について，“設立について国立大学43大学中36大学の賛同が得られ，28大学の技師が集まり第1回が開催された”との記録が残っています。この会は毎年輸血部会議に合わせて開催され，第5回開催時には懇談会から脱皮して“全国国立大学輸血部会議技師研究会”と称するようになりました。2005年以降，輸血部会議に公立大学と私立大学が参加することに伴い技師研究会にも全国の100施設以上の検査技師が参加する大きな会となりました。2020年には発足30周年を迎え，その機会に従来の規約を改定し，“教育と研究”を目的に加え名称についても「全国大学病院輸血技師研究会」と変更して活動を展開することにいたしました。

技師研究会総会は当学会秋季シンポジウム共催輸血部会議の前日に開催されるのが通例です。各大学共通の課題や業界のトピックスをテーマにした各種調査報告など毎年内容は異なりますが貴重な情報交換の機会となっています。特に経年調査として実施している「業務量アンケート調査」の報告では，各施設の業務量を可視化することにより，例えばアルブミン使用量や製剤廃棄率，臨床検査技師の配置数などの施設間比較を容易にし，各施設の業務改善に繋がる有用なデータベースとなっています。不規則抗体カードの普及を目的に立ち上げたワーキンググループの成果を“不規則抗体カードフォーマット案”¹⁾として学会誌に報告しました。「輸血関連情報カード」発行アプリの公開に先立つこと5年前の事です。“教育と研究”の分野では，大学病院の多彩な症例経験を基に「症例集」を作成し後進の技師教育に活用しています。また，技師研究会のネットワークによる多施設共同研究が実施され，その成果²⁾も報告されています。

近年大学病院の輸血細胞治療部門には，従来の輸血・細胞治療に加え，再生医療への関与が求められており，検査技師はその中心的な役割を担うものと自負しています。「技師研究会」では今後も大学間の人的ネットワークを活かし，“技術向上”“情報交換”“教育”“研究”を四柱とした活動を通じて，輸血・細胞治療及び再生医療の発展へ寄与していきたいと考えております。

（参考資料）

- 1) 石井規子 他：不規則抗体カード作成に関する現状と方向性，平成21年度全国大学病院輸血部会議技師研究会における調査と討論より，日輸細治会誌，58:710-715，2012.
- 2) 山田千亜希 他：抗CD38抗体投与例に対する検査の実態と問題点に関する多施設共同研究，日輸細治会誌，67:440-448，2021.

臨床輸血看護師の活動報告

—輸血に最も関与する看護師が製剤の品質管理向上を目指す—

地方独立行政法人神奈川県立病院機構神奈川県立こども医療センター
看護局 岡部卓也

当センターは、こども専門病院のほかに、肢体不自由児施設および重症心身障害児施設を併設した小児総合医療・福祉施設として1970年に設置され、小児がん拠点病院として2013年に厚生労働省より指定されました。当センターは、病院419床、障がい児入所施設90床であり、年間RBC約2500単位、FFP約1000単位の輸血を、数百グラムの低出生体重児から成人に至るまで幅広い対象に実施しています。



現在、2名の臨床輸血看護師が在籍しています。毎月1回、輸血ラウンドと称して、医師、検査科技師、臨床工学技士、医療安全推進室の看護師、臨床輸血看護師らが、3-4セクションを巡回しています。ラウンド時は、事前に確認項目を各セクションへ提示し、機器の確認やヒヤリハット報告に基づく改善状況の確認、輸血に関する聞き取りを実施しています。また、輸血用血液製剤を取り扱う機会が少ないセクションにおいては、セクションのニーズに合わせた演習や勉強会を実施しています。

今回は、当院における血液製剤（赤血球・血小板、新鮮凍結血漿）の時間経過を後方視的に調査し、血液製剤の使用指針と比較検証しました。この内容は、第70回日本輸血・細胞治療学会学術総会にてポスター発表しました。

対象製剤：1587製剤（RBC：580製剤、PC：954製剤、FFP：53製剤）

対象病棟：内科一般病棟（74床）

調査した経過時間：①輸血検査室出庫時刻から実施前医師確認の認証時刻

②実施前医師確認の認証時刻から投与開始時刻

③投与開始時刻から投与完了時刻

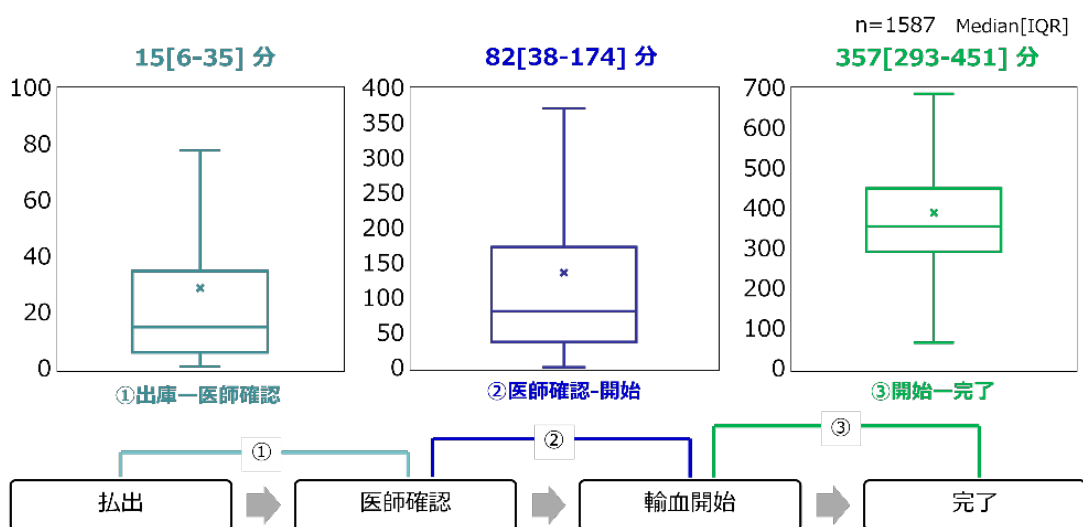


図 全製剤の各経過時間

今回の調査では、①製剤出庫後、直ちに血液製剤が投与開始されていない、②投与時間の中央値が6時間であること、③小児患者の特性があることが判明しました。

製剤が出庫されてから医師確認までは、速やかに実施されているものの、直ちに投与されない要因は複数あることがわかりました。また、小児患者特有の要因として、患者の体重や循環動態等を考慮すると、成人と比較して投与速度が緩徐であり、新たに輸血用ルート確保の困難さが挙げられました。また、成長発達を促すケアプランから遊びを優先するケースもあると考えられました。

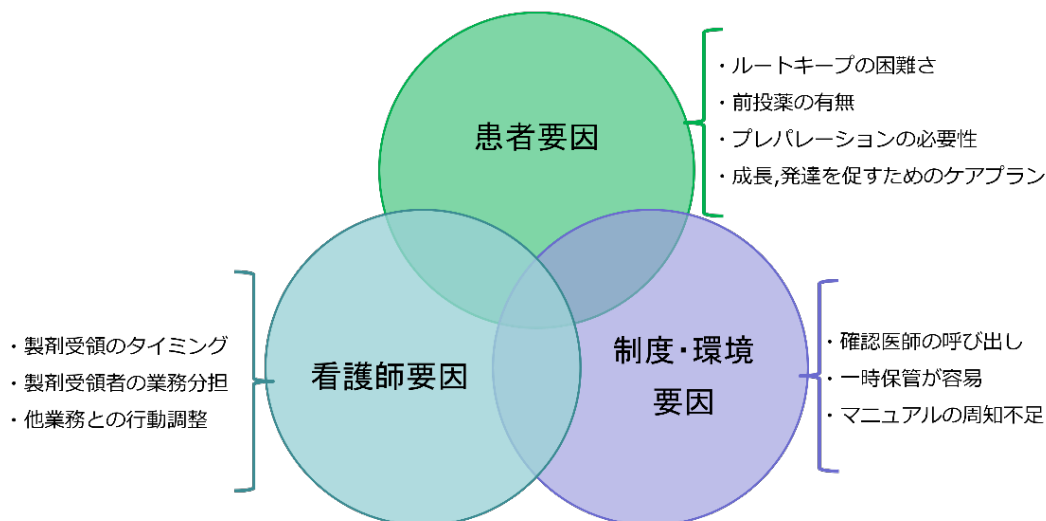


図 病棟で一時保管となる要因

今後、介入可能な改善として、以下の3点が挙げられました。

① 医師、看護師の各連携：

- ・患者のケアプランや他剤との時間を逆算し、出庫可能な製剤を受領する。
- ・医師の指示を3段階に設定し、看護師との認識を合致する。

例 A：緊急・今すぐ投与、B：出庫可能後速やかに開始、C：日勤帯で投与開始

② 患者と共通認識を持つ：

- ・プレパレーションを通して、輸血を優先する場合があることの理解を促す。
- ・病棟保育士と協働し、ケアや遊びのプラン変更の柔軟性を持つ。

③ 看護師教育：

- ・臨床輸血看護師による現場での教育、啓発活動による正しい知識を普及する。
- ・経過時間を中心とした各病棟での問題点の共有と改善策の討論を促す。
- ・成果をフィードバック、他部門と情報共有することで相乗効果を期待する。

検証の報告を踏まえて、今後の活動では以下の2点を中心に取り組む予定です。

- ①小児患者特有の事由も考慮し、各部署と連携しながら看護師個々の輸血に関する知識・行動レベルの向上を促す。
- ②経過時間による客観的な指標での監査を継続し、業務レベルの改善を促し、各セクションの底上げを支援する。

編集後記

新たな体制で第18号 e-News を発行させて頂いてから、早いもので1年が経過します。この間、相変わらず COVID-19 感染拡大が猛威を振るい、本原稿を記載している 2022 年 9 月中旬時点で、ようやく本邦でも第7波が収束しつつあるという状況です。

秋季シンポジウムと全国大学病院輸血部会議もハイブリッド開催の予定ですが、最近の Web 会議の様子を伺いますと、皆さま大分慣れてきたようで、Web 参加の方からの質問も多くなってきたように感じます。参加方式に関わらず、会員の皆様に、活発な御討論をして頂けますことを祈念しております。

(野崎昭人)

一般社団法人日本輸血・細胞治療学会 広報委員会

委員長

加藤 栄史 (愛知医科大学病院)

副委員長

松本 雅則 (奈良県立医科大学附属病院)

委員 (50 音順)

生田 克哉 (北海道赤十字血液センター)

池田 和眞 (岡山県赤十字血液センター)

上村 知恵 (慶應義塾大学病院)

岸野 光司 (自治医科大学附属病院)

小見山 貴代美 (豊田厚生病院)

長村 登紀子 (東京大学医科学研究所附属病院)

野崎 昭人 (横浜市立大学附属市民総合医療センター)

日高 陽子 (東邦大学医療センター大森病院)

藤田 浩 (東京都立墨東病院)

松本 真弓 (神鋼記念病院)

山崎 喜子 (青森県立中央病院)

米村 雄士 (熊本県赤十字血液センター)

担当理事

羽藤 高明 (愛媛県赤十字血液センター)